別府港

大分県土木建築部港湾課

〒870-8501　大分市大手町3-1-1
☎097-536-1111㈹
URL：http://www.pref.oita.jp/17300/index.html

1. 概況

別府港は、九州の東部大分県の中央に位置し別府湾西奥部にあり、人口12万余りの国際観光温泉文化都市である別府市を背後にもつ都市型港湾である。

本港の所在する別府湾は北に国東、南の佐賀関の両半島にはさまれ、東に豊予海峡を経て、愛媛県の佐田岬と相対している。湾の南側は高崎山と佐賀関半島の間に大分平野が広がり、沿岸部は臨海工業地帯をなしており、西側には鶴見岳、由布岳、伽藍岳などの阿蘇火山帯に連なる山々が姿を見せている。

別府湾西奥部に位置する本港は、世界的観光資源である久住、阿蘇、雲仙などをひかえた世界有数の温泉地別府の海の玄関口として、また、阪神、瀬戸内地域の内海各港との連絡に至便であり、往時より内海交通の要衝として繁栄してきた。

明治時代に入り当時の松方正義知事は、別府が関西有数の温泉地であるにもかかわらず船舶の錨地がない点に注目し、明治3年に築港着手、明治4年現在の北浜地区中泊地が竣工した。以来、近海海運に多大な便益を与え、別府港の発展に拍車を加えることとなった。

戦後、わが国の観光国策が大きく取り上げられるとともに、別府港においても国際観光ルートの一環として港湾の整備が強く要望されるに至り、昭和22年日本港湾協会にその修築計画の立案を委嘱し、わが国初めての観光港修築計画が作成された。

それにもとづいて運輸省第四港湾建設部が実施計画案を樹立、昭和26年待望の観光港修築に着手した。これにともない地方港湾として発足した別府港は、背後の都市および港湾の性格からみて、日本唯一の観光港と称せられるもので、将来における国際観光の見地からその重要性は高まり、昭和26年9月重要港湾の指定を受けた。昭和39年1月大分鶴崎地区新産業都市の指定、同年10月別府・阿蘇・熊本・長崎を結ぶ九州横断道路の開通など、九州観光の拠点として別府の役割は大きくなってきた。

それに対応して、昭和35年5月別府～宇和島の定期航路が観光港から発着を開始、昭和42年7月関西汽船株式会社の別府～四国・阪神航路が石垣地区へ移転、昭和45～46年にそれぞれフェリーが就航している。

これらのフェリー就航に対応するため、昭和30年代から昭和50年代前半にかけて石垣地区第1埠頭、第2埠頭、及び第3埠頭において水深4.5mから7.5mの岸壁が相次いで整備され、別府港のフェリー機能は石垣地区に集約されることとなった。

また、昭和59年に石垣地区第3埠頭に水深12m岸壁1バースが完成するとともに、平成23年には石垣地区の新埠頭（第4埠頭）に水深10m岸壁1バースが完成した。第4埠頭の新岸壁は震災時の緊急物資輸送に対応できるように耐震強化岸壁として整備されるとともに、平常時は近年寄港数が急増しているクルーズ船に対応しており、平成26年5月には14万トン級の大型クルーズ船「ボイジャー・オブ・ザ・シーズ」が別府港に初寄港を果たすなど、前述のフェリー就航とともに国際観光温泉文化都市別府の海の玄関口としての機能を果たしている。

さらに、同地区では、今後予定されている別府～阪神航路のフェリー大型化、分散・老朽化した旅客上屋の統合、にぎわい空間の創出に対応するため、水深8m岸壁や旅客上屋等の港湾施設を整備する計画である。

一方、別府港発祥の地である北浜地区は、中心市街地に隣接しているという地理的条件も活かし、旧桟橋周辺を都市機能用地として埋め立て、大型商業施設が誘致されるとともに、平成22年にはヨットハーバーが整備され、マリンスポーツの拠点として機能している。

また、別府市は海岸線沿いに市街地が近接しており、台風等による越波被害を多く受けていたが、平成26年には4地区の総延長2.2kmに亘る直轄海岸事業が完成した。特に、石垣地区の南側に隣接する餅ヶ浜地区では、養浜による面的防護が実施されており、年間を通じて市民・観光客に親水性の高いウォーターフロントを提供するとともに、イベント時には多くの来訪者で賑わうなど、憩いとレクリェーションの空間として機能している。